



Title	入聲に就いて
Author(s)	張, 源祥
Citation	懷徳. 1941, 19, p. 30-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89073
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

入聲に就いて

張 源 祥

一

北京語に於ける字音の發し方に四聲の有ることは周知の如くである。四聲とは四種の聲調即ち語音の抑揚高低である。漢字の發音は元來凡て一字一音節である。勿論日本の漢字讀音に於て「一日」をイチ、ジツと讀むが如く、各字音が熟音化してゐる場合があるが、これは轉化の結果であり、イチのチ及びジツのツは夫々先行音に附屬する接尾子音に過ぎず、本來獨立の資格を有する音素でないから、矢張一字一音節である。北京語で「一日」を「*ih*」と發音するのも固より一字一音節であり、その各字の音節の内部に於て夫々抑揚高低があり、抑揚高低に四種の類別有ることが四聲なのである。但し同じく四聲といつても、今日の北京語の四聲と漢詩を作る場合の平仄の四聲とが同じものでないことも人の周知する所である。彼の唐宋の詩に用ひられたのは梁の沈約の四聲韻譜に本づいたものと謂つて可い。

(平仄の四聲)

平 上去入

(北京語の四聲)

上平 下平 上去

兩者を比較するに、所謂平仄の四聲には入聲が有るが、北京語にはそれが無い。北京語では平聲が陰平或は上平と陽平或は下平の二種あるが、平仄の四聲の方では其れが分れてゐない點が違ふ。四聲の各々の發音の仕方に就いての説明は今その場合でない。此の小篇の特に關説しようとするのは入聲のことである。

二

聲韻史の教ふる所によれば、入聲の歴史は最も古く、未だ四聲の備らざりし上代の古音の中に夙に平聲と並び存した。その後周代には上聲が加はり、三國末頃には去聲も現れ、斯くて漢魏の際には四聲全く備はり、齊梁の間に至つて嚴となつた。降つて元代になると胡族が長驅侵入した爲、言語上に於てもその影響著しく、中原の音韻は爲に大變化を來し、入聲を失ふと同時に平聲中に陰陽の別を生ずるに至つたことは王世貞の藝苑扈言に「大江以北、漸染胡語、時時採入、而沈約四聲遂闕其一」とある如くである。

では江北に於て失はれた入聲の行方はどうなつたかといふに、其れは下平・上・去の三聲の中へ混

入して、概ね母音で終るものになつてしまつたのである。斯くて今日北京語系統に屬する人々に取つては入聲の理解が困難となつてゐるが、南方の言語になればなる程明かに入聲が存在してゐるし、又前述の如き多少の轉化を経てはゐるが、日本に於ける漢字の讀音にもそれが判然と表れてゐる。そして其れは南方諸語及び日本の讀音が古き時代の字音をそのまゝに傳へてゐるからである。支那にありても、古來の入聲を亡失した北京語は眞の支那語でないと言へ論ずる者があり、眞に支那全體を包含した近時の所謂國語運動に於ては、北方の四聲の上は西南の入聲を加へて新に五聲の統一的國音を創制してゐる程である。

入聲に就いては唐の元和韻譜に「直而促」とあり、明の釋真空の玉鑰匙歌訣及び康熙字典には「短促急收藏」と説明してゐる。孰れにしても急促にして餘音なきことをいふのである。その存亡は已述の如く、大體揚子江一帯を境界として所謂「北無入、南無平」の形勢を呈してゐる。そして南する程その存在が明確であり、又交界地方では、亡びんとして僅に存するの狀がある。粵語（廣東語）の聲調は九聲であり、平上去が各々上下に分たれるのみならず、入聲の内部が更に上入・中入・下入の三種に分化し、且つ音尾の接尾子音も k ・ p ・ t の三種ある程變化に富んでゐる。日本讀音に於てきで終るもの（石・斥・赤・益・易・壁等）及びクで終るもの（學・嶽・格・革・屋・藥等）は k に收まり、フで終るもの（十・入・蝶・葉・業・甲・獵・急等）は p に收まり。ツで終るもの（出・雪・月・越・

石 shek 學 hok 十 shap 出 ch'ut 七 ch'at

物・髪・舌・脫・末等）及びチで終るもの（一・七・八・埒等）は^トで收まる。いづれも入破と謂つて語尾を吞み込むやうな心持ちで發音するのである。尙入聲が上・中・下に分たれる點に就いて云へば、上入或は陰入は入聲中で調子の最も高いものであり、且つ長さの短いものである（例へば竹^{チウ}—chuk）。中入は上入に比し、音の高さは稍低目で長さは稍長^{チウ}（例へば捉^{チウ}—chuk）。下入或は陽入は粵語の下平と共に九聲中調子の最も低いもので且つ短促のものである（例へば濁^{チウ}—chuk）。次に福建語に就いて見るに、閩語の聲調は本來、平上去入が各々上下に分たれ合計八聲であるが、普通上上と下上の別が判然しないから結局七聲に統合することが出来るのである。

入聲に就いては、その音尾に k・p・t の三種の別あることは粵語に同じく、上入及び下入の二種

である點に於て稍簡である。

百 pek 執 chip 七 ch'it
 上入
 六 lak 十 tsap 一 chit
 下入

更に吳語（上海語其他の蘇浙語）に至つては、上平・下平・上聲・去聲及び入聲の五聲であり、入聲に就いては一色で細別が無い。且つ此の系統に於ける入聲は音尾の k・p・t の區別消失し、上下の相違も無く、我々が驚いた場合にアツと息を詰めるやうな短促な音

(之を聲門塞音 glottal stop と呼ぶ)に變つてゐる。此れは前にも一言せる如く、入聲が南北の交界地帯に於て保存と消失の中間を彷徨する状態にあるものといつて可いであらう。左に一二の例を示して既述の諸語系に於ける入聲の状況を相互に比較して見よう。

廣東語

福建語

上海語

北京語

福 luk (下入)

hok (上入)

fo? (入)

fu (下平
非入聲)

六 luk (下入)

lak (下入)

lo? (入)

liu (去
非入聲)

?は聲門
塞音を示す

三

斯く南すればする程入聲が鮮明な姿を現すといふことは、平聲と共に最も古き歴史を有する入聲が古く傳はつたまゝの昔ながらの形を保存してゐるといふことであり、遠くは五胡、近くは蒙古族の侵入を受け、民族的に變遷の甚しかつた中原では胡語に染んで聲調の上に大變化を來したといふことを意味するのである。比較的近い時代(清初頃)に至つて漸く開けた雲南・貴州・新疆等に入聲の行はれないのも、既に變化した後の國都の言語が所謂官話として、政治上の權力の該地域への進展に伴つて移植されたことを物語るものである。このやうに入聲の分布状態を知ることが、支那の、言語を中心

とする文化史的變遷の蹟や、日華の古代に於ける文化交流を知る一の旁證ともなるといふ學術的興味と共に、今日上海・福建・廣東・香港・海南島の地方の人々や又これら華南出身者の最も多い南洋その他の華僑との言語的交通、從つて相互の理解の上に實際上大いに役立つことなのである。

詞藻

金剛子念珠銘 并序

中井天生黃裳

金剛子念珠。瓊山莊樓癡詞長所贈。大小二串。一百八球。一十八球。天生儒而奉希教。正派。佛亦所敬尊。基督教亦有念珠。承貺以來。朝所用之。

金剛有子。纍纍象圖。天工不遺。鐫刻成文。十十維八。繫以絲縑。左轉右旋。振舉珊瑚。載懸載摩。爰駐迷魂。手順心移。莫不清純。堅剛一觸。煩惱是斷。不玷不壞。靈氣是薰。無相爲宗。無住爲體。體堅有章。以爲金剛。搏搏厥實。赭而淺黃。無大無小。璨垂寶瓔。朱組貫穿。聯延紆縈。一念三千。懸在雙掌。摩珠鳴球。迎送異聲。先世罪業。消滅無象。